

## 子育て支援プログラム

### 一 はじめに

本稿では、甲南大学人間科学研究所、および、甲南大学心理臨床カウンセリングルームとの共同で開催された、子育て支援プログラムについての活動報告を行う。

子育て支援プログラムは、前述の通り、人間科学研究所とカウンセリングルームが共同で行っている「臨床心理学の知見を活かした子育て支援」の実践活動である。同プログラムは、平成十三（二〇〇一）年から開始され、現在（二〇一三年十二月末日）までの、べ約七八〇〇名の親子が利用した実績がある。人間科学研究所、およびカウンセリングルームにとっては、大きな社会貢献の場であると言えるだろう。

一方、このプログラムは、子育て支援の実際を学ぶ大学院生の貴重な研修機会の場としても活用されてきた歴史がある。このプログラムにスタッフとして参加した大学院生が修了後、地域の発達相談や幼稚園の相談業務などの親子の支援に携わるということも少なからずあった。さらに二〇一一年度からは、大

学院の修了生がスタッフに加わり大学院生の指導にあたるようにもなった。これは、本プログラムに課せられた「臨床心理学を学ぶ大学院生が、地域援助の研修を積む機会としてのシステムを構築すること」という当初の目的のひとつを達成した証左でもある。

今年度は、一連の子育て支援プログラムについて、「縮小しながら実施予定」という方針が出されたこと、またこれまで子育て支援プログラムを一手に引き受け開催してきた担当者が退職し、別の相談員三名に引き継がれたこともあり、例年になく波乱に富んだプログラムとなったのではないかと思う。

今年度は担当者ごとに、各プログラムの報告を行う。なお、子育て支援プログラムについて、「縮小しながら実施予定」という方針により、「子育てサークルまっぼくくり&プレイグループどんぐり」のフォローアップグループ「まつの木くらぶ」は開催されなかったため、報告はない。そのため、「親子相談」、「うりばうくらぶ」、「子育てサークルまっぼくくり&プレイグループどんぐり」の三つのグループについての報告となる。

### 二 うりばうくらぶ

「うりばうくらぶ」は、就園前の子どもと保護者を対象に毎月第二・四火曜日の十一時から十二時半の時間帯に行っている。

事前に申込をした親子が、甲南大学の一室に母子ともに集まる。時に、父親が参加することもある。スタッフは、保育士と筆者、修了生や大学院生である。各回は、保育士による設定遊びの時間と自由遊びの時間から構成されている。設定遊びは、「うりぼうくらぶ」の歌から始まり、出席をとる（子どもは名前を呼ばれたら返事をして保育士がもつタンバリンを鳴らしに行く）、絵本の読み聞かせ、親子でできる手遊びやふれあい遊びに加え、毎回異なるメインの活動が含まれる。保育士は異年齢の子どもが参加できるよう配慮し、家庭ではなかなか体験できないダイナミックな運動や、「うりぼうくらぶ」での活動をきっかけに家庭でも親子で楽しめる季節感のある制作などを取り入れている。自由遊びの時間は、スタッフが子どもの自主性を尊重しながらかかわったり、親が日頃抱えている悩みをスタッフに話す場合もある。また、保護者同士が交流をする場にもなっている。

### 三 親子相談

「親子相談」は、就学前の子どもと保護者を対象に行っている個別相談である。毎月二回第一・三火曜日の十時半から十二時の午前中に設定している。担当者が親子それぞれにつき、親子同室で行うため、親子関係や親や子どもが担当者への関わりなどをその場で観察でき、多くの情報を得ることができる。主

な相談内容は、子どもの発達や子どもへの関わり方についてであった。担当者は必要に応じて、子どもの発達検査を実施したり、保護者に別のグループを紹介する場合もある。今年度は、再来の親子や後に報告する「まつぼっくり・どんぐり」の参加者が親子相談につながったケースもあった。

### 四 子育てサークルまつぼっくり&プレイグループ

#### どんぐり

「子育てサークルまつぼっくり&プレイグループどんぐり」は就学前の子どもとその親を対象とし、親と子がそれぞれグループに分かれて行う活動である。全五回の活動を一クールとし、年間二クール行う。参加者は各クールごとに募集し、固定したメンバーで一クール活動する。

当初の予定では、このプログラムは、今年度前期、第二十二期をもって終了となる予定であった。しかし、参加者からの強い要望により、今年度後期も開催されることとなった。前期と後期で担当者が代わったため、前後期を別々に報告する。

#### 四ー一 二〇一三年度前期（第二十二期）

第二十二期は、四名の親と二名の子どもが参加した。参加者は全員が前年度以前から継続して参加している方であった。スタッフは、カウンセリングルームの相談員一名が子育てサーク

ルまっつぱつくりのファシリテーターを勤め、修了生で本活動の経験者三名と後期博士課程の大学院生一名が交代でプレイグルーブどんぐりのスタッフを勤めた。第二十二の活動は以下のようなものであった。

#### 子育てサークルまっつぱつくり プログラム

第一回…「トークでリフレッシュ」 子育ての困りごとや、子どもの成長を感じる瞬間など、子育ての悲喜こもごもを共有した。

第二回…「子育て講話」 本学名誉教授の松尾恒子先生に親子のスキンシップの大切さについてお話をうかがった。

第三回…「自分を再発見！体験ワーク」 本学修了生の甲斐暁子先生がファシリテーターとなり、母としての自分、社会人としての自分を振り返るワークを体験した。

第四回…「子育て講話パートⅡ」 本学名誉教授の松尾恒子先生に親として努力していることを聞いていただき、子育ての困り事を相談した。

第五回…「まっつぱつくりの想い出作り」 まっつぱつくりでの体験をシェアする意味で文集づくりをした。

子育て講話では「情報をもらうだけでなく、整理しながらお話を聞くのが自分自身の安心につながる」、自分再発見ワークでは「案外幸せな今かもしれないと気づいた」、等の感想があった。当初は正しい子育ての答えを求めて参加されたが、活動を通じて、子育てに正解はないと気づいていかれたようである。また、仲間やゲストの先生方との安心できる関係の中で自分の気持ちを適切に開放し、共感しあい、エンパワーされることを大切にすることができるようになっていかれたのではないかと感じている。

#### プレイグルーブどんぐり

スタッフが一對一で子どもを見守りながら過ごした。母子分離がスムーズだった子どもが途中で親とはなれることに不安を見せることがあったが、親は「子どもが素直に甘えられるようになった」と、望ましい変化と受け止めていた。逆に、母子分離の際にひどく混乱して親を困らせた子どもが、涙をためながらも親にバイバイし、いたずらをしたり、他の子とかかわろうとしたり、とその場を楽しむようになった。「スタッフが子どもにの気持ちに寄り添って臨機応変に対応してくれることがありがたい」と感想をいただいた。子どもの変化の意味と一緒に考えようとするスタッフへの親の信頼は厚い。

本活動は、予算が打ち切りになったこと、また、プレイグルーブどんぐりの主要スタッフである院生を、参加する子どもと同

数確保することが難しくなったことで、今年度前期での終了を予定していた。しかし、回を重ねるごとに、参加者から「継続して欲しい」、「こんな活動がなくなるのはもったいない」との声があがったことで、継続可能性について検討することとなった。

#### 四二二〇一三年度後期(第二十三期)

前節でも述べた通り、子育てサークルまっぼくuri&プレイグループどんぐりの継続を望む参加者の声は、第二十二期の開催中から上がっていた。終了後も、何とかして継続してほしいという声は、担当者や本プログラム開始当初からかわってこられた松尾恒子先生の元にも寄せられた。最終的には、主催元であるカウンセリングルームのルーム長・富樫公一先生の下、予算を使わないという条件での継続が認められることとなった。講師料が支払えないということで、学外の先生には事情を斟酌していただき、ボランティアでの出講をお願いすることとなった。また、これまでになかった試みとして、学内の先生にも講師の依頼を行った。

以上のような経緯で第二十三期が行われ、五名の親と三名の子どもが参加した。まっぼくuriのスタッフは、後述のプログラムの通りとなり、一方、どんぐりのスタッフは、カウンセリ

ングルームのルーム相談員一名、修了生で本活動の経験者二名がすべての回に参加し、修士課程の大学院生一名がここに加わった。

子育てサークルまっぼくuriの内容は以下の通りである。

#### 子育てサークルまっぼくuri プログラム

第一回…「子育て講話①」本学名誉教授の松尾恒子先生を囲み、参加者の感じている子育てについての課題や悩みを語り合いながら、解決策を探る試みが行われた。

第二回…「体験ワーク」本学修了生の甲斐暁子先生がファシリテーターとなってグループワークを行い、参加者各自の感じ方、考え方、伝え方の癖を知り、互いに共有し、自らのあり方を振り返った。

第三回…「茶道体験」…本学学生相談室の友久茂子先生に出講していただき、十八号館グループワーク室を使って、茶道の体験を行った。これは、新しい試みであったが、「ゆつたりとした素敵な時間を過ごせた」などの感想が寄せられ好評であった。

第四回…「ディスカッション・父親を『育てる』には」今期の担当者である新道がこれまで甲南大学人間科学研究所で行ってきた父親の子育てに関する調査、また学外で行ってきた父親への子育て支援の知見を元に

現代の父親事情について話し、各家庭のさまざまな事情や制約を勘案した上で、いかに夫婦で子育てを行うかについての議論がくり広げられた。

第五回…「子育て講話②」松尾恒子先生に再度出講していただき、子育てについての尽きない悩みについて話し合われることとなった。

全五回のプログラムを通じて参加者から、子育ての悩みなどについて相談する場であると同時に、参加者同士が当事者として悩みなどを共有し、互いに励まし合い、力を得る場となっているという感想が寄せられた。また、このプログラムに参加することが、自らの子育てを振り返る場となり、漫然と続く子育てに区切りをつけることができているという声も聞かれた。子どもと離れて、子育てについて考え、話し合う場というのは、当事者である母親にとっては貴重な時間となっているようである。

子育てサークルまっぴり&プレイグループどんぐりが縮小しながら最終的に打ち切られる予定であることについては、今回の参加者全員から何とか継続してもらえないかと切望された。他にこのような子育て支援の場がないことが大きな要因である。また、長くこのプログラムに参加している方からは、本プログラムがなければ現在の自分の子育てではなかったという旨

の声も聞かれた。

一方、プレイグループどんぐりでは、これまでと同様に、当初母親との分離直後から泣いていた子どもが、回を経ることに泣く時間が短くなり、他児やスタッフに関心を向け、一緒に遊びはじめたりするようになるなど、興味深い変化がみられた。

今回、参加していた子どもたちの年齢は〇歳八ヶ月から三歳以下で、いずれもまだ保育所や幼稚園など日常的に長時間保護者と離れた経験の少ない子どもばかりであった。そのため、母親と一時間半離れることは非常に不安の高まる事態であるだろう。ここに臨床心理士の専門性を生かした見守り方とかかわり方で接することにより、子どもたちは徐々に場への安心感を得て、周囲に興味を示し、楽しそうに過ごす時間を持つことができるようになる。このような体験は、子どもたちにとっては、他では得がたいものであろうし、子どもたちが今後世界を広げてゆく上で大きな礎となるものであると思われる。

子どもたちがプレイグループどんぐりの場で楽しそうに過ごす時間が増えることを、これまでのスタッフは「たくましくなる」と表現していたのは印象的である。この場で得た「たくまし」さは、子どもを預ける母親にとっても、子どもを頼もしく思えるようになるであらうし、プログラム自体への信頼にもつながるものであるだろう。

しかしながら、スタッフが一对一で子どもを見守ることが難しくなってきたと言わざるを得ない点が今期の課題であった。

まず、これまでプレイグループどんぐりの活動の中心を担っていた大学院生のスタッフの確保が事実上ほとんど不可能となっていました。そのため、今回この活動を支えたのは、ルーム相談員と大学院修了生が中心であった。この点は、今後への大きな課題として残されている。

大学院生が臨床心理士の訓練の過程で、言葉でのかかわりがまだ不安定で十全でない子どもと出会い、いかに言葉以外の部分も含めて子どもとかかわり、子どもに安心できる状況を提供するかということを体験しておくことは、非常に大切なことではないかと考える。言葉を用いなければ臨床心理士の専門性は発揮できないのか。決してそのようなことはないはずである。

母親と離れたことによる不安によって泣く子どもと一緒に時間を過ごすのは決して心穏やかなものではないが、そこで何ができるのか考え、こどもとかかわることは決して無駄ではない。

また、大学院終了直後、資格を得るか得ないかの頃、多くの修了生が経験するのは、乳幼児健診の職場である。プレイグループどんぐりの活動は、そのような現場に入る前に、実際の乳幼児の様子を、かかわりを通してながら学ぶことができる貴重な場である。このような絶好の研修機会をみすみす逃してしまうのは、勿体ないような気がしてならない。

以上のように、一度は打ち切りの憂き目に遭いながらも、参加者の強い要望により復活を遂げた子育てサークルまつぼっくり&プレイグループどんぐりであるが、ひとまず来年度も開催の見込みは立つに至っている。初めて、担当者としてこの活動に関与することになった筆者としても、この点は喜ばしいことであると感じている。この活動を続けた方がよいと思うのは、参加者が述べている通り、他ではあまりなされていない子育て支援の試みであるという点である。このような試みができるのは、大学という研究機関ならではの特色であろう。

また、この活動が、子育て支援にはよりきめの細かいニーズがあることを気づかせてくれたという点も見逃せない。参加者によると、親子でなされる子育て支援はあるけれども、それらは突き詰めると子ども中心のものであって、子育てをしている母親のしんどさ、やりにくさ、苦しさなどに焦点を当てたものではない、という。確かに、母親同士が子育ての悩みや困りごとについて、ある程度プライバシーが守られた空間で、語り合い、共有し合う場というのは、貴重なものかもしれない。

しかし、前述の通り、プレイグループどんぐりのスタッフの確保という大きな問題を抱えていることも事実である。参加者の要望、十年以上も地域で活動を行ってきた歴史もあるので、是非とも活動を続けていきたいと考える所存である。

## 五 おわりに

以上、今年度の子育て支援プログラムについての報告を行った。

来年度は、本プログラムの実施予算が大幅に削られての実施となることが決定している。しかし、甲南大学の子育て支援の歴史を途切れさせないように何とかやり過ごしていきたいと考えている。

(岩本 沙耶佳・新道 賢一・南野 美穂)

## 思春期発達支援事業（フレンズクラブ） フォローアップ

甲南大学心理臨床カウンセリングルーム思春期発達支援事業（愛称：フレンズクラブ）は、二〇二二年度まで人間科学研究所との共催で、発達のアンバランスをもつ思春期（小学校五年生～中学校三年生）の子どもとその保護者を対象として、親子並行のグループによる支援を行ってきた。

発達のアンバランスをもつ子どもは、「友達が欲しい」というこの年齢らしい欲求を抱きながら、特性に阻まれて経験できないことが多い。子どもグループでは、子ども一人ひとりにサポーターと呼ばれるスタッフが付き添い、注意深く見守りながら、子どもたちの内発的欲求が適切に満たされることを目標に活動してきた。保護者グループでは、グループのまとめ役としてスタッフがファシリテーターを勤め、愛着がゆつくり発達してくる子どもたちと年齢相応の形で愛着を形成し、子どもの存在を受け入れつつ、適応的な行動に導けるよう、一緒に考えてきた。

二〇〇五年の立ち上げ時から先生方に相談に乗っていただき、お力を借りて、院生のみで行ってきた活動だったが、二〇一二

年度で打ち切りとなった。打ち切りの際、対象上限年齢の中学校三年生になっていない子どもが二名おり、大学としての責任を果たすため、その子達が中学校三年生になるまで、希望があれば、回数、料金の設定を同様にして、カウンセリングルームでフォローしていくことになった。今年度は、二名ともフォローアップ面接への参加を希望し、前期九回、後期十回の面接を実施した。以下に、今年度の活動、および、これまでの活動全般について報告する。

### 今年度の活動

前期 五月十一日～七月十三日 毎週土曜日午前十時から十時五十分

参加者 中学校二年生男児と保護者

スタッフ 中学校三年生男児と保護者

子ども面接一名

保護者面接一名

後期 十月十二日～十二月二十一日 毎週土曜日午前十一時から十一時五十分

参加者 前期に同じ

スタッフ 保護者面接一名



子ども面接二名

場所 子ども カウンセリングルーム プレイルーム

保護者 カウンセリングルーム 面接室2

子どもの様子

参加している子どもは特性的に環境に左右されやすい。そのため、活動日までの生活が思うように行かないと、活動中に、体の動かし方が少し乱暴になる、道具の取り扱いがぞんざいになるなど、遊び方が荒れることがあった。その反面、トラブルなく過ごせた週は、明るい表情で、適切な態度で遊ぶことができた。

二人の子どもは長く一緒に活動してきた仲間という意識を持って、相手との活動を楽しんだようである。一人は体を使ったダイナミックな遊び方が、一人は絵を描くなど静かな遊び方が好きと、好みは異なり、時間中、ずっと同じことをしているわけではない。しかし、時々自発的に接点を持ったり、また、スタッフの声かけに助けられながら、折り合えるところで一緒に楽しむ姿が見られた。一方が休むと「同年代がいなくてさびしい」と発言するなど、相手と同じ空間にいることを大切にしたいようであった。

保護者の様子

フレンズクラブに参加した当初は、子どもの行動の背景を理解することが難しく、子どもの衝動性に振り回されがちだった保護者も、今までの活動で、子どもの特性を理解し、子どもに合わせていこうとするようになった。保護者の子どもを見る視点の変化があったからか、今年は、困った行動への対処より、子どもの成長が感じられるエピソードを取り上げることが多かった。

「自信がないから、何かをするときには母親に確認することが多かった子どもが、母親がいなくても、自分で判断して行動するようになった」「自分は人からどう見られているかを気にするようになった」、など、好ましい子どもの変化を明るい表情で報告する姿が見られた。また、「学校で嫌がらせをする子がいるけど、相手にしないでおいたって言うから、えらかったね、それでええんよってほめた」と、子どもに必要な対応ができる自分の子育てに自信を持っている様子も語られた。

時には話題が脱線しながら、一緒に子どもの成長を確認して、喜び合う場が持てたように感じる。

## まとめ

二〇〇五年に開始したフレンズクラブは二〇一三年十二月に最後の参加者を送り出し、足かけ九年続けた活動もすべて終了となった。この間で十六期開催し、のべ二十組の親子が参加した。

子どもは、フレンズクラブに来て初めて、友達と最後まで楽しく遊びきくという体験をする場合も多く、そんな体験を積み重ねることで、自分のうちにある関係を築く力に気づき、自信を持つていくようである。

保護者は、我が子の衝動性の高さにははらし、他の親に対して肩身の狭い思いをしたり、学校の参観日で他児と同じ行動ができない我が子が他の親の目にどう映るか気になったりして、保護者同士の交流に消極的にならざるを得なかった経験をもつてグループに参加することが多い。そんな保護者にとって、フレンズクラブは、初めてほっとできる子育て共同体として機能してきたと感じている。

多くの院生がこの活動でスタッフを勤めてくれた。「お兄さんお姉さんが子どもを受け入れてくれて、どう振舞ったらよいか教えてくれるのがあるがたい」と多くの保護者が感謝を述べた。また、自分だけでは人と接することが苦手でも、スタッフ

が助けてくれることで勇気を出せる子どもの姿を見てきた。スタッフあつての活動だった。今現場で活躍している元スタッフが「フレンズでの経験があるから、現場で少々のことがあってもあわてない」と話してくれたことがある。ここでの経験がスタッフの今後の臨床に生きてくれたら、かけた苦労が報われる。今まで一緒に歩んでくれた保護者の方々、子どもたち、スタッフに感謝している。

(南野 美穂)

## 二〇一三年アートグループ活動報告

今年度のアートグループは、これまでどおりファシリテーターの著者が講師の椋田三佳さんとともにグループを運営し、ルーム研修員の市橋章子さんにも参加していただいた。昨年度から始めた各回のグループ活動報告をWeb上で公開することでも継続して行った。人間科学研究所の活動自体が再編された年度でもあり、予算上厳しい状況となったため、既存の画材を生かした技法を多用した一年だったが、参加者の作品からは面白い表現がたくさん生まれ、小さいグループ活動ならではの穏やかな雰囲気での運営ができたと思う。その中でもいくつかの印象的な回について簡単に記載する。

アートグループでは、毎回課題となる画材やテーマを参加者が自由に解釈して制作するスタイルをとっている。前期の第一回目では、「おはながみ」を使ってコラージュ制作を行った。ちょうど昨年度末に人間科学研究所主催のアートセラピー・ワークショップで、おはながみ・ティッシュユー・ペーパーが使用されたことに触発されて、アートグループでも同じ素材を使ったのである。ワークショップに参加した筆者と椋田さんは、コラージュ制作に短時間集中してより無意識的な表現を目

指し、そこに表れたものは自分だと見なして向き合うというセラピー課題を興味深く経験した。しかし、アートグループではより自由な表現とアートに親しむ体験を重視しているので、画材を提示するに留め、メンバーは好きなようにコラージュを制作する方向でグループを進めた。今回使った用紙は薄くペラペラの紙であるにもかかわらず、繊維に沿って千切るときは簡単に切れるのに、繊維に逆らうとなかなか切れにくく思うような形にならないというもので、デザイン性の高いものをつくるにはハサミを使うほうが楽という性質だった。紙の質感をいろいろな点で感じ取れる作業だったと思われる。参加者は二十色以上ある紙を破ったり切ったりして、画用紙や色画用紙の上に液体のりの薄めたものを筆で塗りながらどんどん貼っていく、いろいろなタイプの作品が出来上がった。立体的な感じの作品(図1)あり、平面的なコラージュでありながら、レイヤーのもつ質感によつて存在感を醸し出す作品(図2)あり、参加者も他の人の作品を見て「こういうこともできるんだな」と発見することの多い回だったと思う。

前期第四回目の回ではモビールを制作した。盛夏に涼を感じたためということもあるが、その前の回でワイヤーと粘土やスチロール球を使って動きを感じさせる作品を作った創作上の流れがあったので、「動き」を念頭に入れた制作課題になったのである。椋田さんは特殊な画材としてたこ糸とワイヤー、制作

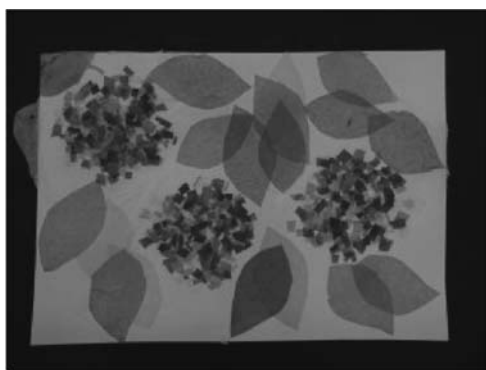


図 2

してオリジナル度の高い作品をつくる人もいた。シェアリングの間に作品を三極の枝に吊るして鑑賞した(図3)のだが、白くうねった枝に全員分を掛けるとそれぞれの作品の面白さが相乗効果を生んで楽しい雰囲気展览展示となった。ディスプレイの仕方を工夫することで作品の見え方



図 1

のヒントとして紋切の画集を提示した。筆者はその本の中に使ってみたい模様を発見したが、参加者の中には画材を駆使



図 3

が変わることを再確認した回だった。

後期の第一回目のグループは、見学者も交えて比較的参加人数の多い回だった。この日の課題はローラーに絵具を付けて模様をつけるようにして描くという技法を試すというもの(図4)で、先に地にクレヨンで絵を描いて浮かせるとか、後から絵具で加筆するなど工夫をすることもできた。技法としては単純だが、何かを具体的に描くことは難しいので、抽象的な表現に慣れていないと制作が重荷になったり、作品のもつ力に気圧されてしまうのではなかろうかという心配も筆者としてはあったのだが、参加者は一人三作くらいいろいろな描き方を試みて個性的な作品を生んでいった。この回は、普段の回ではあまり



図4

ト課題に基づき作品を完成させるという営みは、かなりの心のエネルギーを必要とすることだとつくづく思い知らされた十三年間であった。社会復帰を目指す人の中には、そこまでのエネルギーは保って参加することは難しく、見学だけで終えていく人もいたし、グループに参加する過

できない共同制作を行い、模造紙の上にマスキングテープを全員で貼った後、交代でローラーによる着彩をして作品を完成させた(図5)。グループに初めて参加した人もいる中で、各自が思い思いにローラーを動かしたにもかかわらず、予想以上に調和のとれた作品が仕上がり、口々に「面白いね」と言いながらグループを終えられた。

アートグループの活動は、今年度をもってこれまでのグループ・アクティヴィティ形式を終了することになった。カウンセリングルームの一室で仲間のいる中で一回ごとに異なったア



図5

参加であっても一回のアートグループで何かを創るという行為に集中して取り組むことで作品は完成し、それを一緒に眺める人がいるということ、参加前には存在しなかったものが生じるのは確かであり、そういう場を維持してこれたことが、この活動の最大の意義だったと筆者としては考えている。

(内藤 あかね)

程で、目に見えて安定的に振舞えるようになった人もいる。比較的健康度の高い参加者でも、自分の求める表現、体験をここで見つけられる人もいれば、見切りをつける人もいる。しかし参加回数が多い人には作品やグループへのかかわりに成長の跡が伺えるといふだけでなく、少ない

## 園芸療法活動報告

学生相談室では、二〇〇〇年度より、人間科学研究所との共同研究事業として園芸療法活動を研修会と学生向けのグループプログラムの二本立てで実施してきた。一般公開の「園芸療法研修会」は、予算と外部講師との日程調整の難しさにより、残念ながらここ数年開催できずにいる。専門家から話を聞かせてもらうことは、スタッフが園芸療法に関する知見を深める良い機会となるので、今後とも開催できるよう努力していきたい。以下、学生向けの園芸活動を中心に報告する。

学生相談室では毎週金曜日の午後に、学生向けに「金曜Reアワー」という自由参加型のグループを開催しており、その中で季節に合わせて園芸療法プログラムを導入している。今年は、前・後期合わせて計三回実施している。内容は、プランターでの野菜作り（五月）、サツマイモの収穫（十一月）、クリスマスアレンジメント（十二月）である。他にも、園芸活動の収穫物を使って調理をするプログラムを十一月に行っている。また、プログラム以外に、スタッフの作業として、春休み中である二月末に、春の草花の寄せ植えをしたり、サツマイモの苗植えを六月に行ったりした。サツマイモについては、苗を業者の手違



モロヘイヤの苗が伸びてきました（2013年7月2日）



プランター野菜づくり（2013年5月24日）

いでプログラム実施日に入手できなかったため、スタッフの作業となった。実際したのはスタッフであるが、春の寄せ植えを、入学・進学の春の時期に合わせて相談室内やエントランスに用意でき、その花々が学生を歓迎するかのようになり、季節感を味わってもらうことができてよかった。このように、生きている植物を扱うため、定期のプログラムにうまく取り入れることができない場合がある点が、園芸療法の難しさであり、魅力でもある。

今年も前年に引き続き、五月に野菜づくりと寄せ植えを行った。オクラ、モロヘイヤ、きゅうり、トマトの苗をプランターに植え、学生の目に触れやすい建物入口の駐車場に



設置できるため、身近な実現可能なガーデニングとして自分の生活の中に取り入れたくなった学生もいたようである。今年初めて植えたモロヘイヤは、予想以上に成長が早く、収穫時期の見極めが難しく、初めて試食する時には葉が少し固くなってしまうが、他の野菜は順調に実り、六月末から七月にかけて、毎週ランチアワーにてサラダにして試食できた。ランチアワーとは二〇一一年四月から始めた企画で、昼休みに学生相談室のサロン室を利用して、学生とカウンセラーが昼食を持ち寄り、一緒にご飯を食べる催しで、現在週二回実施している。学生の持参する昼食はさまざまで、手作り弁当もあればおにぎりやパンだけのこともあるため、無農薬野菜のサラダは「健康によい」



オクラの花が咲きました（2013年7月2日）

設置した。苗が日当たりのよい場所で大きく育つ様子を目にした、園芸療法に関わった学生はもちろん関わっていない学生から、「きゅうりが大きくなってきたね」「オクラの花を初めて見た！」「家でも育ててみようかな」などの感想をきくことができた。プランター栽培は、スペースをとらず、ベランダでも手軽に



さつま芋の収穫、今年も豊作（2013年11月1日）



ランチアワーで試食（2013年7月17日）

「ビタミンCが取れる」と学生たちは喜んで食べてくれた。特に、モロヘイヤを細かくきざみだし醤油であえたものは、「おいしい」と好評であった。畑栽培の方は、六月にスタッフサツマイモの苗を植え付け、十一月のグルーブにて収穫と試食を行った。収穫当日はふかしイモを、二週間後の調理プログラムの時に、おもてなしとスイートポテトを作り、試食した。また、学祭中の学生相談室主催のたこ焼きパーティーでも、参加した学生たちにサツマイモご飯をふるまうことができた。今年収穫したサツマイモは甘みが強く、どの料理もおいしく仕上がりが、試食は大成功だった。収穫の時には元々畑作業に興味を持っている学生や、昨年



フラワーアレンジメント完成！  
(2013年12月13日)



フラワーアレンジメント共同作業中  
(2013年12月13日)

ど季節の草花の寄せ  
植えと、昨年と同様、  
一人一本ずつ花を選  
び、順番にオアシス  
にさしていく共同ア  
レンジメントを作る  
ことにした。男性メ  
ンバーが主流となっ

た。対人関係が苦手な学  
生たちが、農作業を通じ  
てお互いの距離を近くし  
ていく様子も見られ、有  
意義な時間を過ごすこと  
ができたと思う。

十二月にはクリスマス  
にちなんだアレンジメン  
トを製作した。今回は、  
バラやアンスリウムな  
ど季節の草花の寄せ  
植えと、昨年と同様、  
一人一本ずつ花を選  
び、順番にオアシス  
にさしていく共同ア  
レンジメントを作る  
ことにした。男性メ  
ンバーが主流となっ  
て作業を行い、迫力のある大きな作品を仕上げ、年末年始エン  
トランスを飾ることができた。

園芸療法プログラムは、生きた植物を扱う難しさを伴うため、  
準備や手入れにかかるスタッフの負担は大きい。しかし、直に  
自然と触れ合う体験は、学生にとって大きな意味を持つと思わ  
れる。対人関係が苦手な学生同士が集い、園芸を媒介にコミュ  
ニケーションが生まれ、互いに心を開いていくさまを見ている  
と、植物の持つ成長力、治癒力と共に集団の持つ相互作用を実  
感することが多い。今後も自然に触れ合うささやかな機会を提  
供する場として、学生相談室という限られた場でできる工夫を  
模索しながら、園芸療法プログラムを継続していきたい。

(渡里 千賀)